

窓

Keiso

Vol.32

2025.4.1

ある時はモツァルトのごと苦しみゆ

明るき藝術を生まばやと思ふ

～中島 敦～

研究室訪問

実践食物学科 講師 紀平佐保子



プロフィール

大学卒業時、管理栄養士免許取得。栄養士養成校での研究教育職を経た後、病院で臨床栄養管理の実務に就き「ウイルス感染抑制」と「長期療養患者の栄養管理」の研究を続けてきました。

本学には2024年4月に着任し、栄養学や食品衛生学等の講義と実験実習を担当。研究と実務とで得た知見を伝えていきたいと思っています。

Q：記憶の中、最初に自分で買った本は何でしょうか。

A：『かいけつゾロリ』です。小学校1年生の時。それまで家にあった絵本や児童文学に親しんでいたところ、書店で出会った「かいけつゾロリ」のエンターテインメント性に強く惹かれて、当時既刊のシリーズ6冊をお年玉貯金で買いました。その後数年、新刊が出るたび買ってわくわく読みました。

Q：最近買った本は？

A：澤田瞳子の『与楽の飯-東大寺造仏所炊屋私記』です。奈良時代、東大寺大仏を造るために全国から招集された作業員と、彼らに食事を振る舞う料理人の物語です。大仏建立時の様子、出来事、人々の思いが「食」を中心として展開する中、随所にミステリー要素もあって引き込まれました。

Q：いま、お手元に読んでいる本は？

A：吉村昭の『白い航跡』を十数年ぶりに読んでいます。日本の疫学の礎であり、「ビタミンの父」と呼ばれる海軍軍医、高木兼寛の伝記小説です。

Q：もし蔵書の中一冊だけ選ぶなら、どの本を選びますか。その理由は？

A：これまで何度も引っ越しをして蔵書の整理をしてきましたが、いつも本棚の中心にはサン＝テグジュペリの『星の王子さま』を置いています。迷い悩んだ時、「本当に大切なこと」に思い至らせてくれる本です。

Q：座右の銘をお教えてください。

A：「我以外皆我師（われいがい、みなわがし）。『宮本武蔵』『三国志』で知られる吉川英治の言葉で、[自分以外のすべての人や物は、自分に学びを与えてくれる]といった意味です。また吉川は「楽しまずしてなんの人生ぞや」とも残っていて、これも大好きな言葉です。謙虚に貪欲に学び、人生を楽しみたいと思います。

Q：学生にぜひ読んでもらいたい本は？

A：伊坂幸太郎『砂漠』を勧めたいです。大学生の日常話で、学生時代特有の気息さをまとった物語ですが、読後は爽快感で一杯になりました。社会人になって読み返すと 懐かしく切ないような感慨とともに元気が湧きます。社会に出る前の、学生の時に読んでいてよかったと思う本です。

Q：読書について、学生、特に新入生へのアドバイスをお願いします。

A：ICT社会のこの頃、本を読まない方も多いかと思います。私も本を開くのが億劫で調べ物をスマホで済ませることが多くなりました。しかし、簡易的に得た知識は定着させづらく、さらには誤った情報や偏った情報に翻弄され、やはり図書から得るものには敵わないと実感します。みなさんにはぜひ、自分の知識や思考を育むための読書をしてほしいと願います。読書は知と心の栄養です。まずは一冊興味のある本を選び、読み進めてみてください。



そろそろ父が買ってくれた文学全集を手に取りうかなあ

東大阪大学名誉教授 吉岡真知子

終戦5年後、奈良盆地の片田舎で生まれた私は、書店がない、図書館がない環境での生活。本とは無縁の幼少期であった。大阪へ勤めに出ていた父が時々少女雑誌を買ってきてくれた。ある時、父は当時出版された画期的な小学館「少年少女世界の文学全集」や「日本文学全集」をシリーズで揃え家の棚にずらりと並べていた。父が私に読ませたいという思いの詰まった全集が居間に並び、家の雰囲気が変わった。子ども心に棚に並ぶ全集の冊数と父の思いの重さに圧倒され、それが重圧となりその本を手にすることができなかった。今も実家にある全集を眺め、当時の自分を思い出し「子どもの心」を考えることがある。

高校に入り「現代国語」の時間が楽しい時間であった。担当の「西田忠」先生の時間は、文章を読み深める面白さ、作品の魅力、登場人物の心を探る不思議な体験をさせていただいていた。作品に酔いながら語る先生の語りと問いから、私はワクワクしながら活字を追っている自分がそこにいた。夏目漱石「こころ」「それから」島崎藤村「破壊」など。夏休みに「チボー家の人々」の長編全五巻を読む課題がでた。白水社の黄色い表紙の五冊を自分の部屋の書棚に大事において読んだのを思い出す。読書を通し作中の人々との出会いと感動は、思春期の自分の心に刺激を与え、「人間とは」を問い続ける経験であった。一方、西田先生の授業から「先生次第で生徒は変わる」ことを感じ、「教育者」「教師の使命」の尊さと責任を強く感じていた。その「西田忠先生」は、東大阪短期大学（当時の校名）で教授として教鞭をとられていたことを、私が赴任して間もなく知った。私が赴任する前の年度に定年を迎えられていたのでお目にかかることは無かったことが非常に残念に思うが、この不思議なご縁を感じている。西田先生からの刺激で書店や図書館で自分が手にして選ぶようになり、描かれている舞台を想像し、主人公と出会う楽しさにワクワクしていた。そのいくつかを紹介する。

石川達三「青春の蹉跎」、青春時代の私は題名に惹かれ書店で手にしてペラペラめくり選んだ。1970年代初め、世の中は学生運動で騒がしく、大学封鎖があちこちで起こっていた。当時、私も大学生で私たちは自然に社会や政治に関心が高まっていた。主人公は法学部に通う優等生。学生運動をきっぱりやめ司法試験

にも合格するが、野心が邪魔をして人生が狂っていくストーリーに、人間の生き方、考え方を問い続けていた。同じく石川達三の「人間の壁」、小学校の女教師が主人公、民主主義の定着を目指す教師たちが国家統制を目論む政府との闘いに立ち上がる。昭和三十年代民主教育の定着を目指す教師たちの姿があった。「金環触」では、政治と財界、汚職、談合の構図が描かれ、社会を動かす人たちの舞台裏にある「悪」と向き合う人間の姿に感動した。このような石川達三の社会性の強い作品に惹かれていた。同じく、山崎豊子「不毛地帯」「沈まぬ太陽」「大地の子」も好きな一冊である。

私は二男の出産を期に6か月の育児休暇を取った。育児をしながら、松本清張の推理小説にはまっていた。高校時代に数学の証明問題を解くのが好きであった私は、「清張」の推理小説を読みながら、証明問題を解くときのワクワク感と解けた喜びが清張の推理小説にはあった。清張の作品は最後の結末に意味深いものがあり、それが作品全体の魅力に返っていくようであった。

今回、図書館長の渡邊先生から依頼を受け、この原稿を書いているが、こうして本との出会い、文学作品との出会いをたどり、私の人生に強く影響していることを改めて感じた。高校時代の恩師との出会いと学びから、文学、小説の登場人物との出会いから自分自身の生き方を考えさせられ、自分という人間が成長させられたのを実感した。私は、大学卒業後、小学校の教員になり「国語教育、国語科指導法」の研究に夢中になったのも恩師の影響が強かったのだろう。また、大学教員になり「こども研究」を始め「こどもとは」「人間とは」「教育とは」を問い続けている自分の原点の一つに、私のこのような読書体験が影響しているように思える。

父から強引に与えられた嫌な思い出のある全集は、今も朽ちた空家の実家にずらっと並んだままである。そろそろ父を思い出しながらその全集を手にとってみようかと思っている。

2024 年度 図書館開催イベント

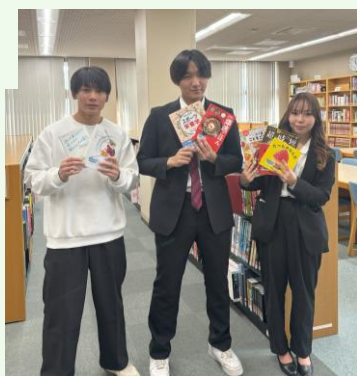
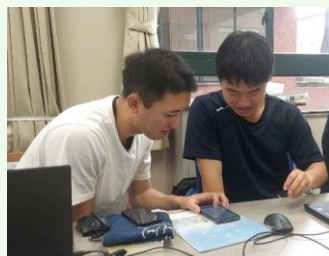
学生 web 選書

2024 年度は、前期・後期共に web 選書を下記の日程で実施しました。

前期:6 月 27 日(木)~7 月 5 日(金)

後期:11 月 28 日(木)~12 月 6 日(金)

参加学生は合計 11 名(前期 5 名・後期 6 名)。それぞれのスマートフォンで、読みたい本や、卒業研究に必要な本などを選びました。



【参加者のコメント】

- ・世界観を広げるための本を選ぶことができました
- ・白居易の書いた詩歌は美しいと思うので、たくさんの人に読んでもらいたい
- ・卒論の研究テーマに関わる、有名な野球指導者についての本を選びました
- ・ごはんを簡単につくったり、かわいくアレンジしたりする勉強になって良いと思った

【リサイクルブック】

図書館では保存期間を終了した雑誌などを年に 1 度「リサイクルブック」として利用者のみなさんに提供しています。昨年は 5 月 13 日から 7 月 26 日に開催し、多くの学生さんが気に入った雑誌を持ち帰っていました。今年も実施予定ですのでリサイクルブック開催をお楽しみに。



【企画展示】

図書館 1 階では季節ごと(ハロウィンやクリスマスなど)の絵本の展示、2 階ではテーマに沿った展示を行っています。もちろん貸し出しもできます。図書館にきて読んでみたいと思える本に出会ってください。



【今年度の図書館イベント予定】

✳️ 学生選書(書店ツアー/web 選書)

2025 年 6 月と 11 月に開催を予定しています

✳️ リサイクルブック

5 月中頃を予定しています

✳️ 読書作文コンクール

後期に予定しています

✳️ 企画展示

随時、実施しています



教員推薦図書

『白い航跡（上・下）』 吉村昭

講談社 1991.4 （講談社文庫版：2009.5）

明治時代に脚気の予防法を確立し、日本初の医学博士となった高木兼寛の一生を描いた伝記小説です。

脚気はビタミンB1不足で起こる病気ですが、

ビタミンという栄養素

が未知だった時代には

伝染病と考えられ、

日本では「国民病」と

されるほど多くの患者、

死者を出していました。

そんな中、海軍軍医の

高木は、食事改善による

脚気予防を可能にし、脚気の原因が栄養不良であると

説きました。

上巻では薩摩藩の貧しい郷土の家に生まれた高木が、西洋医学の先進性に衝撃を受けてイギリスに留学するまでが描かれます。下巻ではイギリス医学を修めた高木が、海軍において世界で初めての疫学調査を実施し、確立した脚気予防法を広めるべく奮闘する様が描かれます。

近代医学の黎明期に類稀な先見性と努力で西洋医となり、強い信念を持って脚気の原因究明と予防法普及に努めたその生涯を通して、疫学や公衆衛生の意義を、保健医療の大切さを感じることができます。

日本で『西遊記』『三国志』の絵本シリーズを、画家の于大武とともに出版し、佐野洋子の絵本『100万回生きたねこ』を翻訳して中国で出版しています。

この本の話題は、「さくら」（日本）と「パンダ」（中国）との、料理・スポーツ・社会的事件などから見る異文化交流の側面だけでなく、カナダやロシア訪問での体験や、世界のチャイナタウンの考察など多岐にわたっていて、作者が2010年当時に捉えた国と国・人と人との交流にある課題が、今も残されていることを考えさせられます。

「異なる環境」「異なる体験」「異なる発想」を互いに知って受け容れていく、異文化交流に終りはしないのかもしれませんが。しかし、佐野洋子が子どもの頃に住んだ家を、北京で一緒に探すなかで彼女の心に触れ、絵本の深いテーマに気づいた話や、詩人茨木のり子が亡くなるまで続いた交流のエピソードは、異文化体験の奥に、普遍的な「人と人との出逢い」が待っていることを教えてくれます。

『ダイアロジカル・スーパービジョン』

カイ・アルハネン他 遠見書房 2024.11

オープンダイアログで一躍日本でも有名になった北欧はフィンランド発祥の対話実践です。著者のカイ・アルハネンさん達は、フィンランドでは、教育、行政、企業分野で実践を積み重ねている人たちで、日本をはじめ、世界中で大学や医療、福祉専門職への研修で対話を用いたスーパービジョンの有効な活用法を解説しています。

この本では、教育・福祉・医療・行政のみならずビジネスの分野でも、よりよい職場環境をつくるためのヒントがさまざまな事例を用いて解説されています。

ダイアロジカル・スーパービジョンは、スーパービジョンがうまく機能していない教育機関や職場において、対話形式を取り入れることで、学生や働いている人たちがよりよい人生を生き、お互いの関係も前向きにしていくことを目指しています。

これから福祉や教育の専門職を目指す学生の皆さんにも、実習や就職活動中のコミュニケーションの一助になる一冊です。



『さくらの気持ち パンダの苦悩』

唐亜明 岩波書店 2010.3

このエッセイの作者・唐亜明は1953年北京生まれ。戦後中国の政治的動乱の中でさまざまな経験をした後、日本の大学院で学びました。

